

平成 22 (2010) 年度 森里海連環学実習 C 実施報告

平成 22 年度の森里海連環学実習 C は、京都大学フィールド科学教育研究センターの北海道研究林標茶区と北海道大学北方生物圏フィールド科学センターの厚岸臨海実験所を拠点として、9 月 6 日から 12 日の日程で実施した。

【実習日程】

- 2010 年 9 月 6 日 実習生集合、ガイダンス、安全教育、講義
- 2010 年 9 月 7 日 厚岸湖および厚岸湾の水質・底質・水生生物調査
- 2010 年 9 月 8 日 別寒辺牛川の水質と水生生物調査、講義、水質分析実習
- 2010 年 9 月 9 日 ガイダンス、安全教育、パイロットフォレスト視察、牧草地土壌調査、水源域調査、樹木識別
- 2010 年 9 月 10 日 天然林土壌調査、樹木同定、講義、グループ発表準備
- 2010 年 9 月 11 日 グループ発表、レポート作成
- 2010 年 9 月 12 日 レポートとアンケートの作成・提出、解散

【実習生】

受講した実習生は、直前のキャンセルが続いたため例年より少なく、京都大学から 8 名、北海道大学から 6 名の計 14 名であった。教職員・TA の数は、京大・北大合わせると 20 数名と実習生よりも多く（写真 1）、とくに多くの技術職員の協力によって、きめの細かい実習内容にすることができた。また、標茶研究林、厚岸臨海実験所ともにちゃんちゃん焼きをはじめとする暖かくて美味しい食事が実習の疲れを癒し、教職員との交流にも一役買っていた（写真 2）。

【野外実習の内容】

今年を受講生が 14 名と少なかったため、班構成を「森」「川」「海」の 3 班（4 ないし 5 名）とした。また、厚岸湖の潮汐の関係で、実習の開始を厚岸臨海実験所での厚岸湖と厚岸湾の実習からはじめ、別寒辺牛川から標茶研究林の森に遡る形で実習を実施した。厚岸湾での実習では、大黒島のゴマフアザラシのコロニーを間近に観察することができた（写真 3 & 4）。厚岸湾、厚岸湖（写真 5）、別寒辺牛川（写真 6）の実習内容はほぼ昨年通りであった。水生生物相が、海、湖、河川でどのように異なり、また、動物の餌資源が、海、湖、川起源から陸起源に移り変わる様子を消化管内容物の調査から把握した。標茶研究林の天然性林内での実習に関しては、毎木調査のプロット規模を 25×25m から 10×10m へと縮小し、代わりに天然性林内の作業道沿いでの樹木同定実習を加えた（写真 7 & 8）。これは、毎木調査にかかる時間を短縮し、樹木を同定する実習を充実させるための変更であっ

た。水質調査では、デジタル・パックテスト・マルチ（携帯型分光計による定量分析）と携帯型イオンクロマトグラフィーを併用して分析の原理と実際の試料測定を実習した。水質分析では、事前に採取していた研究林周辺及び別寒辺牛川流域内の河川水をパックテストおよびイオンクロマトグラフによる水質調査に供し、実習生に水質分析を行わせた。上流から下流に向けて、人間活動（酪農など）や湿原の影響によると思われる水質の変化があり、森里海の連環を考察するのに役立つ多くのデータが得られた。

【実習のまとめ】

「森」「川」「海」の各班それぞれに異なる場の視点から各自が実習で得たデータを解析し、森里海の連環について考察しグループ発表を行った（写真9 & 10）。各班独自の考察がなされており、たいへん興味深い発表であったが、水質分析の結果や樹木同定実習の結果を盛り込んだ考察はむずかしかったようである。

別寒辺牛湿原の水鳥観察館見学やパイロットフォレストのビデオ鑑賞・見学、標茶研究林の人工林間伐区を見学することによって、自然と人間のかかわりの一端に触れることができたものと思う。また、パイロットフォレスト事業に関連して林業に関する講義を加えた。しかしながら、さらに「里」に関する教育内容を充実させる必要があると思われる。



写真1 実習集合写真(標茶)



写真2 ちゃんちゃん焼きパーティ(標茶)



写真3 大黒島(点線内アザラシコロニー)



写真4 ゴマフアザラシ



写真5 厚岸湖での底生生物群集採取



写真6 別寒辺牛川での水生生物採取



写真7 & 8 標茶研究林での樹木同定実習



写真 9 & 10 「森」「川」「海」 班によるグループ発表の様子